

発表要旨

ケイトリン・コーカー

「異質の身体における普遍的なものー 舞踏伝承の始まりと現在」

舞踏は、土方巽を創始者とする日本固有の前衛的なパフォーマンスである。本発表の目的は、舞踏家へのインタビューや舞踏ワークショップのフィールドワークに基づき、1) 舞踏が BUTOH として拡散し、初期の舞踏との間に隔たりがあること、2) 初期の舞踏を経験している舞踏家たちが、いかにして舞踏を新参者に伝承しようとしているのか、を明らかにすることである。

1) 「肉体の時代」と呼ばれる 1960 年代において、舞踏は総合芸術の世界において前衛舞踊として誕生した。1970 年代、舞踏は、既存の日本の舞踊界に認められ、そして世界で評価されることになった。この時点で、ある舞踏家が活動の拠点を海外に移しはじめ、BUTOH として広く世界で知られるようになった。そして 1986 年、創始者土方巽が他界し、舞踏の大黒柱が失われた。1990 年代、舞踏の活動を支えたキャバレーが消滅し、多くの舞踏集団が解散した。そして、厳密な子弟間の系列とは関係なく、多くの新しい実践者が舞踏家であると表明した。この結果、現在多くの舞踏家は土方またはその直弟子に教えを受けたことがない日本人ならびに外国人である。つまり、土方らが舞踏の根っこであるとすれば、現在の舞踏実践者はそこから遠く伸びた枝についている葉っぱであると言える。

2) このような拡散状態にあるゆえに、舞踏を定義することは不可能であろう。しかし、このような状況だからこそ、まずその「根っこ」に位置する踊りと身体を探る必要がある。本研究が対象にしている舞踏家は、土方と共に舞踏を生み出し、一生を舞踏に捧げ、現在も舞踏を伝承している人たちである。

本研究で彼らの実践とコアとなる初期の舞踏の伝承方法を検討するに当たって、2013-2015 年までワークショップに参加した。報告者も参加者の一人として、舞踏家である講師がいかにワークショップ参加者の身体に働きかけ、舞踏を実践する身体を伝えるかを体感した。

彼らが伝えようとする舞踏は、マニュアルなどで伝えられるものではなく、彼らが身体化している舞踏の多角的なあり方を参加者に課題として提示する。その後、参加者の模索している姿を見守りつつ、参加者の体を作り直そうとするか、あるいは自由自在にさせる。この葛藤の中、舞踏の始まりと現在が出会い、次世代の舞踏につながる。それは、身体と身体が調和すると共に、想像と身体、感覚と身体は融合し、変容していく過程である。

舞踏の伝承は現代社会でますます置き去りにされた身体の在り方を取り戻そうとする実践であるがゆえに、より広い文脈においても無視できないものである。